特別支援教育研究論文集

—令和3年度 特別支援教育研究助成事業—

研究協力：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

多様性を尊重し、互いを認め合える児童の育成
～オリンピック・パラリンピック教育を
通した障害者理解を軸として～

東京都調布市立飛田給小学校

主幹教諭 岩田 順子

令和4年3月

公益財団法人みずほ教育福祉財団

要旨

人口約 24 万人、面積約 22 km²の調布市の西側に位置した本校は、児童数 417 人（令和 4 年 1 月現在）、学級数 13 学級、通級指導教室拠点校の設置校であり、開校 46 年目を迎えた。地域は、住宅街であり、古くからの地元住民と新興住宅地の住民とが混在している。学校の南側には多摩川が流れ、北側には、味の素スタジアムや武蔵野の森総合スポーツプラザの大規模なスポーツ施設があり、2019 年にはラグビーワールドカップ、2021 年には東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会などの国際的な大会が開催される地域である。

本校の児童は、明るく素直で物怖じしない反面、自己肯定感が低いことが課題である。東京都の 5 年生に対して行われる調査でも、自分に対する自信のなさや、自分のよさに気付けないこと、自分自身を好きになれないことなどが、他の学校に比べて低い状況が毎年度ある。学校生活の中で自己肯定感を高めていくための模索を日々続けている現状であった。

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会が開催されることが決定した後、開催都市である調布市においても取組が始まった。本校は、大会が開催される会場に隣接している。特に、パラリンピックの車いすバスケットボールの会場が隣接していることから、パラスポーツを知り、応援することを通して、障害者理解を進める意義がある。また、「予測困難な時代」を生き抜き、多様性を尊重する共生社会の担い手となる児童には、「自分の得意や苦手なことを知り、自分を肯定する力」と「自分とは異なる環境や立場の人を認めていく力」が必要である。本校では、こうした状況から、東京都教育委員会の東京都オリンピック・パラリンピック教育を通して障害者理解を軸として、教科横断的な授業実践による研究に取り組むこととした。

研究としては、令和元年度と令和 2 年度の 2 年間、調布市教育委員会指定研究校として全学年で障害理解教育に取り組んだ。まずは、教師間で障害者理解の在り方について討議し、互いの考えを共有することから始めた。その中で障害者理解の段階について検討し、「気付く」から「行動する」までの段階を設定し、「多様性を尊重する児童」を育成するためには「自己理解」と「他者理解」を高めていく必要があることを研究仮説とした。

研究仮説にしたがって、児童の実態を把握するためのアンケートを行い、課題を把握した。その課題を基に、2 年間かけて、各学年で研究授業に取り組むとともに、学年ごとに障害者理解教育の教科横断的な全体計画を作成した。また、授業だけではなく、日常の取組も大切であると考え、グループエンカウンターの手法を用いた朝の会の企画や学級経営上の配慮等を、校内組織の特別支援部ともタイアップして取り組んだ。さらに、全校で実施する体験・交流活動も計画的・継続的に実施した。

令和 3 年度には、研究の最後の年度として、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会後の変容と、作成した全体計画を実施した児童への質問紙調査結果等を分析する。これらの成果を精選し、共生社会の形成に向けた障害者理解教育の在り方についてまとめ、研究成果を普及する。

キーワード：障害者理解教育，多様性の尊重，自己理解・他者理解，

東京都オリンピック・パラリンピック教育，パラスポーツ体験